

# 多様な文化をうみだす都市・池袋

## ——都市研究の観点から考える

三田知実

多様な文化をうみだす都市・池袋。北口には、移民の方々が料理店や食材店を経営しており、チャイナ・タウンが形成されています。近年では東口にアニメ系若者サブカルチャーの拠点も登場し、多様な文化を生みだす都市として池袋が成長を続けています。今回の池袋学では「多様な文化都市・池袋がなぜ生まれたのか?」「池袋の近未来は、どうなるのか?」という二つの問いを都市研究の観点から明らかにします。

### ■はじめに

私の専門は都市社会学で、主たる研究のテーマは衣料文化生産と都市空間です。文化生産という少し難しく聞こえるかもしれませんが、たとえばズボンやシャツのデザインといったものも文化生産にあたります。都内に衣料のデザインを手がけている会社がたくさんある中で、どのようにして東京の青山や原宿が洋服の

デザイン事務所の拠点になったのかについて研究してまいりました。

私は本学の社会学部現代文化学科の助教を務めておりますので、池袋という多種多様な文化を生み出す街に拠点を置いています。本日は、都市型大学としての本学独自の魅力についてお話をさせていただきます。また、私なりに立教大学の都市社会学の展望についても考えていきたいと思っています。

一つめのトピックは「今日の池袋では、どのような文化が生み出されているのか?」です。多様な池袋文化の事例としては、池袋モンパルナス、チャイナ・タウン、城北の学術拠点としての池袋、乙女ロード、西口公園のストリート将棋という五つの事例をご紹介しますと思います。そして、それを都市研究ないし都市社会学の観点から考察していくことを二つめのトピックとします。

## ■池袋という都市

まずは池袋の概要を説明いたします。私が調査対象としていた渋谷や青山の少し北にある新宿駅から山手線に十分ほど乗りますと池袋の駅に着きます。池袋のさらに北は赤羽方面で、埼玉にも近い立地となっております。池袋はまさに城北に位置しています。

現在東京都の人口が一三四八万人ほどで、豊島区の人口は二九万八九〇〇人くらいです。池袋本町や西池袋などの「池袋」を地名に含む場所の人口を計算したところ、だいたい四万七九五〇人でした。また、池袋は、夜の人口が少なく、昼の間は人口が増えるという一般的な都心の人口の動き方をみせています。池袋駅はJRだけでなく、東武東上線や西武池袋線の始発駅でもあり、いわばターミナル駅として位置づけられます。一方で、ほかの都心のターミナル駅とは異なり、駅前に自転車置き場が設置されいたり駅の至近距離に住宅街であったりするなど、池袋独自のアウトホームさが特徴として捉えられます。

池袋駅から山手線に沿って目白のほうに歩いていくと、自由学園明日館あすかがあります。現在南沢に移転していますが、中学高校が以前使用していた校舎はフランク・ロイド・ライトの設計で、重要文化財に指定されております。また、池袋には、中国東北地方の人々を中心とした中国人が多く集まっており、中国人同士で生活を助け合う空間が形成されています。

東口には、豊島区役所の新庁舎があります。旧庁舎は老朽化が激しく、震度七の地震には耐えられない可能性もあり、東池袋の再開発事業と関わって新庁舎ができました。同じく東口方面にあるサンシャインビルは、展望台をオリピックに向けてすべてリ

ニューアルするということで、現在は休館となっております。数年後のサンシャイン展望台の完成を、非常に楽しみにしております。

それから、池袋一番街にみられるように、新しい飲食店などが立ち並ぶ中にも古い建物がまだ建っています。綺麗とはいえないかもしれませんが、賑やかな雰囲気があるのが池袋です。

## ■池袋モンパルナスと「ボヘミア」としての池袋

池袋駅の西側にある立教大学や要町の駅を含めた一帯には、かつてアトリエ村がありました。池袋モンパルナスとは、戦前、芸術家をはじめとした文化人が住まう地域として成り立ちました。一説には、パリ市街のモンパルナスに類似しているということから「池袋モンパルナス」と名付けられたとされています。椎名町の漫画家アパート・トキワ荘には、藤子不二雄のお二方や手塚治虫などの著名な漫画家が住んでいました。立教大学は、旧江戸川乱歩邸を保存しており、週に二回（水曜・金曜）公開されています。

このように、戦前戦後の西池袋や椎名町、長崎方面は芸術家や文化人の拠点となっていました。都市社会学では、こうしたエリアを「ボヘミア」として捉える研究が近年増えています。

「ボヘミア」とは、自由奔放な芸術家、小説家、ミュージシャンなどのいわゆる「ボヘミアン」が集中する場所を指します。二〇〇〇年代以降の都市社会学研究では、文化生産の拠点としてのボヘミアが都市の魅力が高めるのだという議論が展開され始めています。

都会であるにもかかわらず、生活感にあふれ、時間がゆっくり

流れるという特徴は、池袋独自の長所として捉えられます。池袋モンパルナスを「ボヘミア」と考えると、こうした長所は「ボヘミア」的な文化の名ごりと捉えることができると思います。研究上「ボヘミア」というのは、都市成長の一環として捉えられてきています。これはボヘミアンだけでなく、デザイナーやゲイなど、マイノリティーとして捉えられてきた人びとが集まれば、そこには自然に寛容度の高い人びとが集まってくるのだという考え方がです。

リチャード・フロリダというアメリカの経済地理学者がいます。フロリダは、実はこうしたボヘミアンやゲイが多い都市ほど成長が早く、マイノリティーがアメリカの都市成長の原動力となっていることを、統計調査によって証明しました。その調査によってさまざまな点でボヘミアンやゲイが多いところのほうが保守的な価値観を持つ都市よりも発達しているということが検証されました。「ボヘミア」として捉えられる池袋モンパルナスがあつたということは、多様な価値観を許容するような、ほかの地区にはない寛容な土壌が池袋にあつたことを示していると思います。

先日、池袋駅西口に安価で芸術家を入居させる大家さんがいたことがアトリエ村発生の発端であるとお聞きしました。ようするに、池袋モンパルナスは、大きな都市計画ではなく、人と人との直接的な関係によって形成されたのではないかと思えます。池袋というのは、こうした寛容な価値観に包まれた空間なのではないかと私は考えています。

このような自由な雰囲気や高い寛容度、非通念的な性格の人々などは、池袋の特徴だといえます。そしてこうした側面によって

池袋が都市として成長を遂げたのではないかというのが私の仮説です。これに関しては、詳細な資料研究や調査研究を行うことで検証する必要があると思われるので、今後取り組んでいきたいと考えております。

そう考えると、都市としての池袋の価値をどのように高めていくことが期待されるでしょうか。やはり、保守的な常識に縛られるのではなく、これまで逸脱的だと言われていたような言動、価値観に寛容になる必要があります。もちろんモラルを守る必要はありますが、都市の価値を高める場合、多様な価値観に寛容でなければならぬといえます。このように、池袋はさまざまな文化に包まれた空間であり、そうした寛容な価値観によって、私たちも、池袋で成長することができているのではないかと考えています。

### ■チャイナ・タウンとしての池袋

池袋のチャイナ・タウンには、特殊な機能を果たしている店があります。たとえば、池袋駅西口に新しくできた交番の向かい側にあるお店は、一階が食材店で、池袋北口にある中華料理店の食材の仕入れ先として、いわゆる食材問屋の役割を果たしています。しかし、ここは中華料理屋の食材を手配するだけのお店というわけではありません。というのは、二階では携帯電話や航空券を売っているのです。おそらく、日本に滞在できる期限が切れてしまい、携帯電話を契約できない人に、特殊な方法で通信手段を手配しているのだと思われます。航空券に関しては、中国の東北地方の方々が安いチケットを独自のルートで探して、こちらで販売している

と聞いたことがあります。

このように、一見すると単なる中華料理食材店ですが、チャイナ・タウンに住む中国人の生活をサポートする店でもあるわけです。池袋の北口に少なくとも六軒はこうした店の大型店舗があります。

商店街の奥に行けば行くほど、中華料理店や食材店、雑貨屋などが点在するようになっていき、ラーメン屋や居酒屋が軒を連ねています。北側に進めば進むほど風俗店の数が増えるため、女性一人で歩くのは危険だと思われるような、物騒な雰囲気もあります。

チャイナ・タウンにおいては、こうした新しい居酒屋やラーメン屋、風俗店といった、日本人が経営する店と先ほどお話ししたような中国人の経営する店が軒を並べています。中国人によって、あるテリトリーが確保されているわけではなく、日本人の店と中国人の店が併存する空間が広がっているわけです。こうした点は、池袋のチャイナ・タウンの特徴かと思えます。

ここで、なぜ池袋に中国人が集まったのか、今一度その背景を押さえておきたいと思えます。中国人増加の経緯として、一九七八年以降の中国の改革開放政策が挙げられます。国外への渡航に対し、中国政府が寛容になったことで、留学生や中国人旅行者が増えました。その後、一九八三年に公民出国管理法が施行され、私的な国外渡航も認められるようになりました。その後も規制が緩和されていき、日本に中国人が多く流入しました。

一九八三年の規制緩和直後は、福建省や上海の出身者が多かったのですが、その後、吉林省などの東北地方出身の留学生が増え

ていきました。中国の東北地方の方々は、戦争を体験し、満州事変のときから日本語教育を受けている人々を父母や祖父母に持つ人が多いため、日本語に不自由しない人が多くいます。近隣の韓国などに比べて、アルバイトの収入が高いというメリットに加え、日本語を話せる人が多かったため、日本への留学ニーズが高まりました。池袋に居住し、戸田や浦和の日本語学校へ通うという人も多くいたようです。

知人や親族を頼りに中国から日本に来ることを「チェーン・マイグレーション」といいます。チェーン・マイグレーションによって留学してきた人で、留学が終わった後も日本に滞在して結婚をしたり同じ民族の間で生活雑貨店や料理店などを経営したりしている人が多くいます。そうした人々が経営しているのが、先ほどお話しした知音食堂などのようなお店です。チェーン・マイグレーションが繰り返された結果、池袋北口周辺に中国人が集まったわけです。このように見てみると、同じ民族の間でお店を開いて世間話をしているような空間が北口に広がっていて、そうした空間の中を日本人が歩いているという状況です。なんだか二つの異なる世界が併存しているように見えて、非常に興味深く思っております。

池袋駅周辺は木賃アパートが密集していた場所で、一九八〇年代には定住人口が減少し高齢化が進みました。木賃アパートとは、戦後から高度経済成長期にかけて、東北地方からの単身赴任者を主に対象としたアパートです。高度経済成長が収束し、一九八〇年代に土地資産バブルが崩壊した頃には、上京してきた日本地方出身者も経済的に豊かになっていたため、木賃アパートに居住す

る人が減少しました。その結果、アジア系外国人のための安価な仮住まいとして機能し始め、池袋の中国人にとっても格好の生活の場となりました。

このように、チャイナ・タウンとしての池袋には、新華僑の日本への流入という現象が背景にあります。一九七〇年代後半に吉林省などの中国の東北地方出身者を中心とした中国人が出稼ぎで日本にやってくるようになり、そうした人々が池袋の北口周辺に住み始めたわけです。こうした人々は、実家からの呼び寄せや飲食店経営で成功を治めた人が多いため、経済的には比較的安定しています。

また、日本語と中国語が話せますし、中には英語を話す方も多くいますので、通訳や翻訳に従事している人が大勢います。そのため多数の路線が乗り入れていて、渋谷・新宿・上野・東京にアクセスしやすい池袋は、職住近接を可能にする条件を備えているといえるでしょう。こうしたことは、中国人が池袋に住み続ける大きな要因として考えられます。

このように、池袋のチャイナ・タウンは、横浜中華街や神戸の南京町とは異なり、自然に発生したコミュニティだと考えられます。たとえば、横浜の中華街には、吉本興業のアミューズメント施設があり、戦略的に観光地化しています。しかし、池袋にはそうした施設はありません。また、こうしたコミュニティの中で、先ほどお話しした中華料理屋や食材店、中国人向けの旅行会社、それから送金事業者、雑誌・新聞社などが集積しさまざまな機能を果たしています。

たとえば、池袋の北口周辺に居住している中国人をターゲット

とした中国語の新聞が発行されています。北口周辺に住む中国人のうち、お茶の水、新宿、東京方面での通訳や翻訳などの時給の高い就職先を探している若い人をターゲットとした広告なども掲載されています。ですから、そうした広告を請け負う広告代理店も池袋にあります。このように、チャイナ・タウンには中国人社会で営まれる生活があり、だからこそ池袋のチャイナ・タウンは日本からかけ離れた空間を呈しているわけです。

### ■城北の学術拠点としての立教大学・自由学園

城北の学術拠点としての池袋について、お話ししたいと思います。「戦後池袋―ヤミ市から自由文化都市へ―」のプロジェクトは、みなさんもご存じかと思えます。それから、立教大学は三年後に池袋キャンパス百周年を迎えます。そうしたことを考えますと、今後学術拠点としての池袋に立教大学があることの意味を追求することが必要かと思えます。

立教大学は一八七四年、築地の外国人居留地に立教学校として創設されました。一九〇七年に立教大学に改編され、一九一八年に池袋に移転し、現在に至ります。学術・教育の拠点として立教大学や自由学園があり、その周辺をヤミ市やチャイナ・タウンといった多様な文化が取り囲んでいるという点は、池袋独自の魅力です。

また、立教大学や自由学園といった歴史的建造物の中で、研究活動や教育活動が展開されてきたことにも着目すべきでしょう。

立教大学本館（モリス館）をはじめとして、チャペル、旧図書館本館（メーザライブラリー記念館）、第一食堂、二号館、三号館は、

すべて東京都選定歴史的建造物として指定されています。レンガ造りの旧図書館本館旧館の横にある旧図書館本館新館は、丹下健三さんの設計となっています。先ほどもお話ししましたが、立教大学から目白のほうに歩いていきますと、閑静な住宅外の中に自由学園明日館があります。

このように、歴史的に価値の高い建物を拠点として、学術・教育機関が西池袋の象徴として機能している点に立教大学や自由学園の力があります。同時に、池袋の都市としての魅力を促す力としても捉えられます。また、東池袋には帝京平成大学と東京福祉大学がありますが、歴史性や建物の文化的な価値をふまえますと、西池袋の方にオーセンティックな文化があるといえるのではないのでしょうか。

### ■ショッピングの街としての池袋

JR池袋駅には、西武百貨店本店、東武百貨店池袋店、それから若者向けのファッションブランドのショップが入った池袋ルミネ（JR）があります。この西武百貨店、東武百貨店、ルミネの三つが、池袋の中心的な商業施設です。

これをふまえ、池袋がショッピングの街となった背景についてお話しします。まず、東武東上線と西武池袋線が住宅地用に宅地造成したところに沿線を伸ばしていったことが挙げられます。東武も西武も不動産事業を展開していたので、単に沿線を伸ばすのではなく、宅地造成をしたところに沿線を伸ばしていく方法で開発してきました。そのため、東武東上線沿線の近くにある物件は東武不動産が運営しているものが多くあり、西武についても同

様のことがいえます。

その結果、東武線や西武線の沿線に郊外住民として居住する人が増えると同時に、そうした人々がショッピングをしたり、余暇を過ごしたりする空間として池袋が位置づけられることとなりました。百貨店が鉄道事業者の子会社であったことを考えると、やはり東武東上線ユーザーは東武池袋で、西武池袋線ユーザーは西武百貨店本店で買い物をするような傾向にあります。このように、不動産事業としての鉄道事業が販売事業としてショッピング施設をつくるという手法をとってきたわけです。

パルコの本店が池袋パルコであるということも、最近では忘れられがちですが、若者によるファッショナブルなパルコ発信型消費文化も醸成されました。このように、路線を繋げたり延伸したりといった鉄道事業者の企業判断は、池袋の発達に大きな影響を与えたのです。

それから、副都心線の開通によって、志木方面と横浜方面が直通化しています。こうした直通化は、沿線の不動産的価値の向上やEchikaのような、駅構内の空間の有効活用につながります。また直通化によって、池袋は埼玉や北関東だけでなく、南関東も含めた関東全域の顧客をターゲットにできるようになったのではないかと思います。

### ■乙女ロードとオタク系文化

先ほど西武百貨店についてお話ししましたが、西武百貨店の前から東池袋の駅の方へ歩いていくと、サンシャインシティの向かい側に、マンガや、女性が好むオタク系文化のお店がたくさん

あります。オタク系の文化は男性向けというイメージがありますが、女性向けのオタク文化の商品もあります。サンシャインシティの向かい側は、女性向けの商品に特化した店舗が集中していることから「乙女ロード」と呼ばれているようです。乙女ロードで買物をした人たちがサンシャインシティに流れていくので、ALTAなどの経済効果は非常に大きいと思われまます。

### ■一九九〇年代の西口公園ストリート将棋

私は一九九八年に立教大学に入学し、二〇〇二年に卒業しました。二〇〇六年に立教大学の大学院の後期課程に入学した当時は、西口公園には昼間から楽しそうにお酒を飲んでいるおじさんたちがまだいました。多くは日雇い労働者で、その日の仕事を終えたところで昼間からビールを飲んでいるわけです。ビールを飲みながら彼らが何をしているのかというと、将棋です。ビール瓶のケースをひっくり返してその上に将棋盤をおいて将棋をしており、昼間からとてもゆったりとした雰囲気は漂っていました。通りがかりのサラリーマンの人も将棋に混じったりして、実は私も二、三回ほど挑戦したことがあります。

もちろんこれは、公園の管理者側からすると違反行為にあたるのかもしれませんが、「殺伐としていない都心」というイメージが私の中に生まれたきっかけでした。こうしたところにも、池袋というのは多様な文化都市としての側面が見て取れます。寛容な価値観を持つことで、池袋をより一層楽しむことができるのではないのでしょうか。

### ■都市社会学の視点から池袋文化を考える

都市社会学とは「都市の成長が何をもたらすのか」という問いの答えを追求する学問です。都市には多種多様な価値観を持つ人が大勢いるわけですから、そこで諍いがあると生活や仕事に支障をきたすこともありえますし、合理的とはいえません。そうした理由から、都市社会学では、寛容な価値観を持たなければ都会人として生きていくことは難しいということも指摘されているわけです。

肯定的な意味でも否定的な意味でも常識から外れることを異質性といいます。都市社会学では、人口、人口密度、異質性の三要素が高ければ高いほど都市的であるとされています。そして、都市の成長とは、この三要素が相互に影響し合って遂げられるとお考えいただければと思います。

都市社会学は、一九二〇年代にシカゴ大学で本格的に研究されるようになりました。シカゴ大学には、ロバート・エズラー・パーク、ルイス・ワース、アーネスト・バージェスという都市社会学者がいました。一九二〇年代のシカゴは、産業化を背景として、都市としての急成長を遂げている最中だったので、「都市の成長がなにをもたらすか」を追求する研究が支配的でした。都市の成長が何をもたらすのかを考えると、ひとつは、逸脱的な人が集まることによるさまざまなリスクです。

一方で、逸脱的な人が多く集まることで、そうした人々の創造性が世の中に資する可能性も考えられると思いますが、この時代の都市社会学は、否定的な意味での逸脱的な人々が増加することに焦点をあてています。そのため、都市の成長は貧困や犯罪、自

殺、家族解体、ギャングの増加といった都市問題を生み出すのだということ調査、研究したわけです。たとえば、アーネスト・バージェスは、中心部から最も外れたところに高級な郊外があり、中心部から少しだけ外れたところにスラムが集まるという同心円地帯理論モデルを提唱しました。

一方、一九七〇年代以降になると、先進国諸都市で郊外化が進み、都心部の人口が減少していきました。一九七〇年代以降の脱工業化とグローバリゼーションを促す流れが生まれました。これにより製造業の工場が国外に移転され、結果的に日本国内の工場は衰退しました。そして、国内の工場のあつた地域の経済が衰退するという現象が起きました。

このように、都市の状況は人口、経済ともに衰退しています。そこで、都市の衰退という実態に即した都市問題の解決に都市社会学が貢献しなければならぬという流れが生まれました。その結果、「都市の成長が何をもたらすのか？」という問いから「何が都市の成長をもたらすのか？」という問いにシフトしてきているように思います。

たとえば、シカゴにウィットカー・パークというスラムからおしゃれな街に生まれ変わった場所があります。リチャード・ロイド教授は、そのウィットカー・パークが再生した歴史的経緯を論文と文献で紹介しました。

リチャード・ロイド教授の著書に『ネオ・ボヘミア』（二〇〇六年）があります。ここで言われている「ネオ」というのは、デジタル機器を用いて洋服のデザインをしたり他社に音楽の一部分を提供したりするなど、商業的に価値のあるデジタルスキルを持つ

たデザイナーのことを指します。リチャード・ロイド教授は、ネオ・ボヘミアがウィットカー・パークに集まることによつて、シカゴの中心部の文化的創造力を生み出していると指摘しました。最近では「文化が都市の成長をもたらす」という考え方が登場したわけです。

このような二つの問いを池袋にあてはめると、どのようなことが見えてくるのでしょうか。まず、「池袋の成長がなにを生み出してきたのか？」ということについていえば、移民の集中や多様な文化の情勢、治安の悪化、貧困問題、多様な価値観、寛容な環境などが挙げられます。このように、池袋の成長は、社会問題などの否定的に捉えられるものと肯定に捉えられるものの両方を見出ししてきたと思います。次に、「何が池袋の成長をうみ出すのか？」ということについていえば、自由な文化の醸成・創造性が池袋という都市の魅力を高めて、人々を惹きつけると考えることができます。

この二つの命題を検証していくことが、おそらく今後の都市社会学の主たる課題であると思います。池袋という都市は、どちらにもあてはまるので、都市社会学による学術的な貢献がしやすい場所であり、格好のフィールドであるわけです。

### ■立教大学に求められる課題

最後に、都市社会学の拠点として私が所属している立教大学社会学部をご紹介します。残念ながら昨年の三月にお亡くなりになりましたが、立教大学の教授でいらした奥田道大先生は、一九八〇年代に池袋と新大久保の研究を開始されました。奥田先生は当



時、池袋チャイナ・タウンと、新大久保のコリアン・タウンが自然に醸成されていくのではないかと二つの調査研究をされてきました。

立教大学は、都市社会学を専門とする研究者を多く輩出していますが、奥田ゼミ出身の代表的な都市社会学者が五名ほどいます。法政大学社会学部教授の田島淳子先生、明星大学人文学部教授の渡戸一郎先生、専修大学人文学部教授の広田康生先生、立教大学社会学部教授の水上徹男先生、首都大学東京人文学系の和田清美教授です。現在、奥田研究室の理念・役割を引き継いでいるのは立教大学グローバル都市研究所で、チャイナ・タウンについての話で触れた、中国語の新聞の編集長を務めていらつしやる段躍中さんのご報告や、ソウルや上海の研究者を招聘してのアジアリージョナルでの研究活動を行っています。

立教大学社会学部には、今日まで奥田研究室の伝統を守りながら都市社会学的研究の先端を切り開いてきたというプライドがおそらくあるでしょう。今後も池袋の多様な文化に関する調査と研究成果を蓄積し、立教大学ならではの研究を進めていきたいと思っています。ありがとうございます。

## ■質疑応答

**質問①** チャイナ・タウンについて少しお聞きしたいと思います。

冒頭で、豊島区の人口と池袋の人口をふまえたうえで、北口周辺のチャイナ・タウンについてのお話があったかと思えます。池袋における中国人の定住人口、それから豊島区全体における中国人を含めたアジア系外国人の人口は、どのくらい

なのでしょう。もしご存じでしたらご教示いただければ幸いです。

**三田** 池袋のアジア系外国人の人口は、だいたい六く七パーセントです。おそらく近い将来十パーセントに達するのではないかと思います。こうしたアジア系外国人の多さは、豊島区ならではの特性なのかと思えます。お台場を除いた港区、六本木や西麻布方面に関しては、大使館のほかにもその国の航空会社があります。そのため、アングロ・サクソン系の外国人の人口が多くなっています。ですから、港区と豊島区は両方ともかなり外国人人口が多い傾向にあると思いますが、その外国人の出身地や職業が全く異なるという点が、大きな違いだと思います。

これは住民基本台帳による人口で、このうちの外国人の人口を丁目で見るのが今のところできていないので、それに関しては今後取り組んでいくつもりです。また、統計的な数字と実際の数字というのは等しいわけではありません。私たちは主にフィールド調査によって、統計では見えてこないものを追求していますが、フィールド調査というのは、写真を撮影したり事例を集めたりすることで、研究を練磨していきます。今回お話ししたのは、こうしたフィールド調査のいわばファースト・ステージなので、今後研究を進めていきたいと思っています。

**質問②** チャイナ・タウンにはたくさん中国人が住んでいると

思います。そうした方々にインタビューなどをされる中で、たとえば偏見を受けているなど、中国人が困っていることはありましたか。

### 三田

私がかつてフィールドワークに深く携わっていたものに、板橋区の多文化共生調査というものがあります。今回は池袋を都市研究の観点から考えることを目的としています。参考までに、板橋区の例をご紹介させていただきたいと思いません。二〇〇九年に実施されたプロジェクトなのですが、その際、私は大山方面にお住まいの日本人の方と新板橋の方面にお住まいの日本人と外国人の方にお話を伺いました。

その中では、差別や偏見ではなく、生活様式の違いが問題視されていたように思います。たとえば、ゴミの出し方や夜中には電気を消すべきかどうかといった類のことです。

両者にはそれぞれの言い分があるのですが、これは別の見方をすれば、今後長く共存していく意志があるからこそお互いに言い分があることができます。だから、差別や偏見といったものではなく、むしろ、将来長い期間一緒に住む——いわゆる共生というものが徐々に生まれつつあるのではないかと感じました。

### 質問③

今日のお話は「多様な文化を生み出す都市としての池袋」がテーマだったと思います。お話を聞いていた限りでは「生み出す」というより「受け入れる」「土壌のある」「ポヘミア」についての話だったと感じました。池袋という都市が、今後、文化を生み出していく側面を強めていくために必要とさ

れるものについて、お考えがあれば教えていただければと思います。

### 三田

創造的な人々や多様な価値観を受容するような土壌の醸成が、新たな文化の創造につながっていくのではないかとというのが私の考えです。たとえば、池袋モンパルナスについての話の中で芸術家の流入についてお話ししましたが、芸術家が入ってきただけでなく、彼らが池袋でうみだした文化がある」と理解していただければと思います。

たとえば池袋モンパルナスに関していえば、過去に生み出された作品、チャイナ・タウンに関していえば、中国人とどのように共生していくか、という考え方が徐々に浸透してきました。やはり池袋というのは、さまざまな集団がいます。寛容な態度や価値観が池袋のよさであり、そこには大いに可能性があると思います。また、それをうまくアピールできるような機会を獲得できれば、池袋のよさを認めてもらえるようになるのではないのでしょうか。

### 質問④

池袋駅西口と東口についてお尋ねしたいと思います。西口の方は中国の方などが移民してきて、自然発生的に現在のような状況になったということがあると思います。何十年前、サンシャイン60の裏には治安の悪そうな物騒な雰囲気のある場所がありました。ヤマダ電機LAVIの裏にあった公園にも、昔は日雇い労働者の方がたむろしていました。そうした雰囲気のを一掃するために、豊島区がアニメショップなどを誘致したのだと聞いています。現在はいわゆる「腐女子」

と呼ばれる女性の方がたくさんいらつしやつて、見た目にはとても明るくなつたと思います。

自然発生的に形成された西口のチャイナ・タウンと計画的につくられた東口の乙女ロードの明るさというものの間で、今後ひずみが生じる可能性は考えられるでしょうか。そうした可能性について少々不安を感じておりますので、お考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

### 三田

たしかに東口方面に関しては、大規模な再開発によって過去が隠蔽されたと捉えられる面があります。池袋の駅前には高層マンションが多く建っています。港区や千代田区などの都心に通勤・通学するために三十代を中心とした若い方々が高層マンションに住んでいます。

また、江東区の方には、オフィスビルとして使っていたものを、日雇い労働者のための簡易宿泊所として利用するようになったところがあります。生活保護を受けられるようになるために、そうした人々に住所を提供する場所です。このように、ホームレス問題の不可視化されてしまっているという問題も徐々に増えています。

駅が開発され、高層マンションが建てられたことで、池袋のイメージは改善されたと思います。ただ、こうしたクリーンなイメージと実態の間にある差異について、我々研究者が調査・研究し、その関係性の内実を明らかにしていき、隠蔽されてしまった池袋の問題についても、深く追求していくべきだと思えます。そして、両者の間にある溝を埋めるのではなく、実態に沿ってどのように解決していけるかを考えるこ

とが最初の課題であると考えております。

(みたとともみ 立教大学社会学部現代文化学科助教)